

2024 年度「ジュニア・ SHIPPING・ジャーナリスト賞」について

四方を海に囲まれた日本は、水産資源や観光など海の恩恵を受ける一方、せまい国土から採れる必要な資源の量は限られています。そのため、私たちの暮らしに必要な食料やエネルギー資源の多くを海外からの輸入に頼っています。そしてそのほぼ 100%を船で日本へ運んでいます。

「ジュニア・ SHIPPING・ジャーナリスト賞」は全国の小学生・中学生・高校生の皆さんに、それら貿易を担う「海運」などの海事産業やそれにかかわる「船」や「港」について学び、その重要性を理解してもらいたいと 2013 年から開催し、今年度で 12 回目を迎えました。2024 年度の応募数は 1,503 作品（小学生部門 690 作品、中・高校生部門 808 作品、チャレンジ部門 5 作品）でした。

審査委員と講評（順不同・敬称略）

歌手・エッセイスト・教育学博士 アグネス・チャン

今年の作品を読ませてもらうと、船や港に関わる過去・現在・未来を感じることができました。これまでの船の歴史や現在海で働いている人たちの役割や課題、そして海に関わる産業の未来像や今後の環境問題も含めて、どれも具体性があり説得力がありました。本当にあらゆる角度から調べ上げていて、興味深く読ませていただきました。なによりも若い皆様が強い関心を持って海や船のことを考えてくれているのは嬉しく思います。

全国新聞教育研究協議会 理事長 小林豊茂

小学生部門は見学会や旅行先などの実体験の中で興味関心を持ち、作品制作へ繋がっている部分を多く感じられました。特に手書きの作品は読み応えがあり、楽しく審査させてもらいました。中学生・高校生部門は、「海運」「物流」だけではなく、働く人にスポットを当てると内容の視点が面白く感じました。漠然としたテーマではなく、自分なりに調べた具体性のある作品テーマが多く、素晴らしく思います。

東京海洋大学 教授 黒川久幸

環境や物流などの世界的な課題のテーマだけではなく、「船酔い」などのユニークなテーマも多く、非常に楽しく読ませていただきました。自分が「なぜだろう？」と感じた中でテーマが仕上がっている作品を多く感じました。例えば「なぜ港の近くには工場が多くあるのか」といった疑問を持つと、船や港湾を身近に感じることはできないのでしょうか。また、色使いやレイアウトも年々レベルが上がっているように感じます。

(公財)日本海事広報協会 理事長 岡部直己

今年も多くの素晴らしい作品をありがとうございます。全体的に独自視点で課題やテーマを設定されている作品を多く、読み手を意識した構成や工夫を多く感じました。情報化・IT化が進んでる中で、自分自身で現場に取材するなど、掘り下げ方に熱意を感じ、とても頼もしく思いました。ぜひ来年以降はお友達もお誘いのうえ、ご応募いただけると嬉しく思います。